

# 大阪を愛した文学者たち、そのままと人

高橋俊郎  
Takahashi Toshio

宇田川文海から織田作之助、藤沢桓夫まで。大阪のままと人を愛し、作品とした作家は数多いが、近代文学の発生を起点として、新たな文脈のもとで甦る井原西鶴のリアリズムの精神、エスプリの効いた漫才との融合など、独自の文学的土壌を生み出した大阪の文化と風土を見つめる。

たかはし・としろう  
1953年生まれ。大阪市に図書館司書として勤務し、大阪市立中央図書館副館長で退職。  
現在は大阪文学振興会総務委員・帝塚山派文学学会副代表を務める傍ら大阪近代文学を研究する。雑誌『大阪春秋』編集委員。編集や執筆にかかわった書籍に『織田作之助』（河出書房新社）、『織田作之助の大阪』（平凡社）などがある。

「文学の土壌」があつてこそ「文学」が生まれる。そして、その土壌そのものの「大阪」と「大阪人」を描くことが、すなわち人間の真実を描くことにつながる。と信じた文学者たちがいた。

明治150年にあたる今年には、近代文学の発生から見直すのに格好の機会である。実はそれもまた、大阪が始まりだった。

数多い大阪を描いた文学者の中から、大阪のままと人への強いこだわりを持った幾人かを見直してみたい。

## 1 文学の近代化の嚆矢は大阪から 宇田川文海『何櫻彼櫻銭世中』

明治18（1885）年4月10日、朝日新聞連載第1回の紙面の一部を転載したので、じっくり見てもらいたい。タイトルには「趣向は沙士比阿の肉一斤、文章は柳亭種彦の正本製」「\*1」と注釈が付いている。この連載のユニークなのは、第1回を「発端」と題する中等学校生3人の会話文とした点で、挿絵は、当時の大阪で最もハイカラ

な鉄橋心齋橋の橋上である。

「ヤア中村君、僕は今では東京にも滅多にない、初代柳亭種彦の正本製を買ったが君のは何だい」

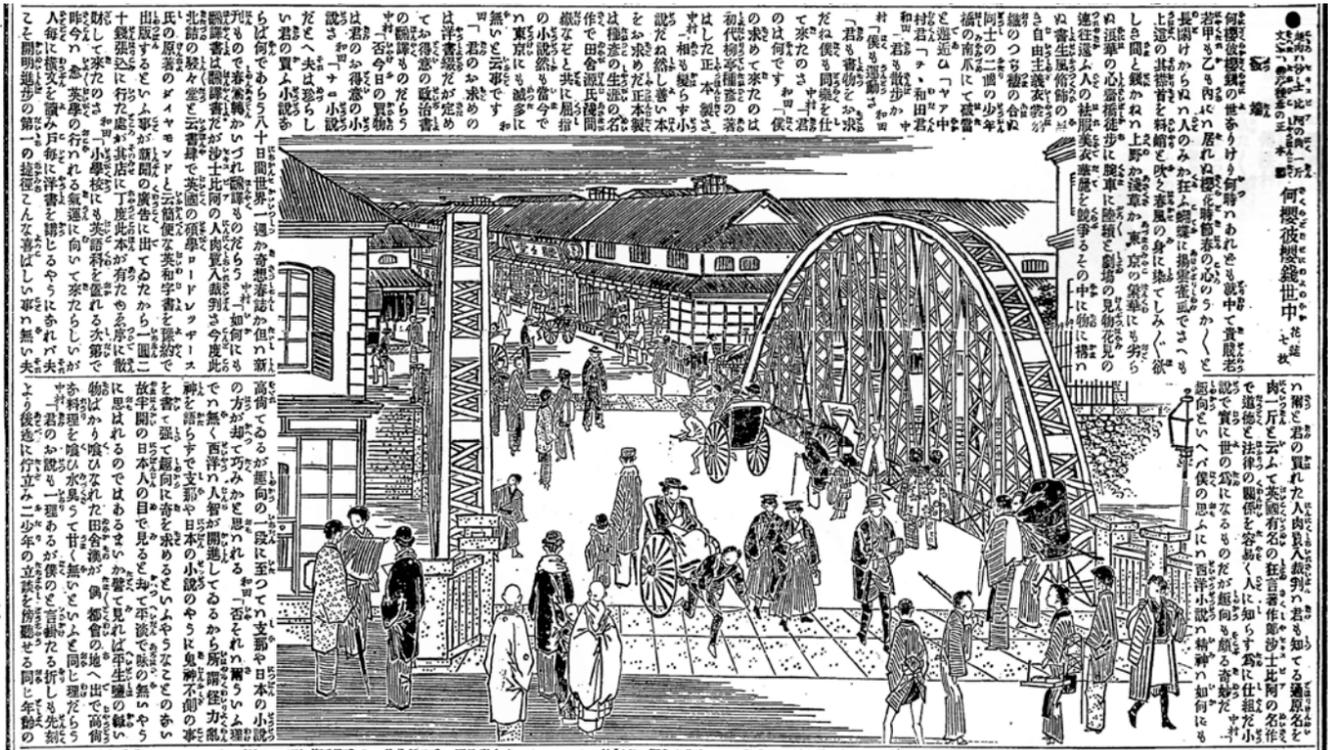
「ヨ、和田君、僕は翻訳書の沙士比阿の肉質入裁判さ。道徳と法律の関係を容易く知らすために仕組んだ、実に世の中の為になるものだが、趣向もすこぶる奇妙だ」

「西洋は人智が開進しているから所謂怪力乱神を語らずで、半開の日本人の目で見ると却って平淡で味わいのないように思われる」

と、立ち話する2人に、小説狂の鳥山君が割って入り、

「かく言う僕も今、旧幕時代の裁判書の古写本を求めたが、其の中に面白い裁判がある故、御両君の肉肉裁判と正本製の両書を今夕一夜拝借し、御両君の御説を折衷して西洋小説の精神と日本小説の趣向と互いの妙所を採り、古写本の実説に交加して文法は正本製の響に倣い、一篇の小説を作つて御両君の御批評を仰ぎましょう」

そして、第2回から物語が始まり、時は幕末、



『何櫻彼櫻銭世中』連載第1回の紙面の一部

宇田川文海筆

文学に西欧を持ち込んだ文海の手法は、日本文学における近代化の大きな一歩だった。挿図にある鉄橋心齋橋は、文明開化の象徴そのもの。  
出典／明治18（1885）年4月10日付朝日新聞

太郎に渡す。  
「ポーシャ」東役所裁判の場に現れる大公儀隠密米田小三郎「\*2」  
実は中川貫介の遺娘で、庄太郎を婿に迎える玉栄の変装。  
ストーリーはシェイクスピア劇を踏襲しつつも、因縁の絡み合う中で、「胸三寸の肉」の裁決にだけ込む序破急のテンポは、さすがに当代初の新聞連載流行作家宇田川文海である。  
宇田川文海は本名鳥山棄三、つまり『何櫻彼櫻銭世中』第1回「発端」の「鳥山君」である。江戸の本郷新町に生まれ、僧籍にあったが、廃仏毀釈によって還俗し、「まいにちひらがなしんぶん」の組方に雇われてから新聞記者として立つことを決意し、秋田、神戸と転々として、明治8（1875）年、27歳で大阪最初の日刊新聞「浪花新聞」を創刊した。明治14（1881）年には創刊2年目の「朝日新聞」に入社し、『北国奇談檣の橋』を連載して評判となり、駁々堂本店から出



宇田川文海

全国を転々とする中で大阪に行き着いた文海は、その後リアルな大阪を描くことで、新聞連載流行作家として活躍した。

出典／『大阪繁昌誌』（1898年、東洋堂）の著者近影



るものはいない。

「安うてうまいもの」の食べ歩きは『夫婦善哉』の大きな魅力とされるが、長谷川幸延の作品中に登場する「大阪の食傷小路——銘々の特色で飲ませる一流、二流が、東から二葉、お多福、鶴源、二鶴、正弁丹吾」とうまいものの表現は、織田作之助が太刀打ちできるようなものではない。役者が違うといったところだろうか。

その長谷川幸延について作之助は、昭和18（1943）年の随想集『大阪の顔』でこう書いている。

「長谷川幸延、宇井無愁、大庭さち子の諸氏も大阪を描いているが、しかし、大阪を描くということ、大阪的であるということとは自ら別である。私はこれらの諸氏の大阪を描いた作品に、大阪的材料を素材にしている点を見ることはあっても、そこに大阪的なものを、感じたことは、かつてない。それというのも、いったいに通俗小説はその本質上大阪的で有り得ないのだ。何故なら大衆はリアリズムを嫌う。だから、通俗作家の名誉とは、つねにリアリスト失格に甘んずることにあるのだが、しかし、幸か不幸か、大阪的とはリアリズムを離れてあり得ないからである。」

また、『法善寺横町』の直木賞選評では小島政二郎が「この種類の作品は書き易いと思う。それに、この世界では秋田實氏がもっとと旨くて、深みのある、もっとペーソスのある作品を書いている。」と評している。どっぷりとその世界に浸った者が描いたのと、長屋住まいの周辺人が描いたのと、同じ大阪でも情趣には二面性がある。

織田作之助は終戦直後の短期間、太宰治や坂口安吾らとともにデカダンスな生き方そのものものと、それを反映した作品内容が既成の文壇に反逆して



藤沢恒夫とその仲間たち

昭和7（1932）年頃、富士見サナトリウムに入院中の藤沢恒夫（中央）を見舞に来た林広次（秋田實、左）と長沖一（右）。  
出典／藤沢恒夫写真アルバム

いる点などから「無頼派」と呼ばれた。しかし、坂口安吾の江戸期の洒脱・滑稽な戯作を復活すべきという「新戯作派」に近しいものを感じるし、作之助は西鶴以降の「語り」を重視した軽妙・洒脱な「戯作」を目指していたもよう、自ら「日本軽佻派」を名乗っていた。これは司馬遼太郎の『近代説話』\*6につながるものとも考えられる。織田作文学は、創作期間7年あまりで咯血死により未完成のままとなったのが残念である。

### 3 大阪の都会的ユーモアを形成した3人組 藤沢恒夫「花粉」と秋田實・長沖一

昭和36（1961）年11月に書いた藤沢恒夫の『わが小説』では、昭和11年（1936）11月7日から12月31日まで35回にわたって朝日新聞夕刊に連載した『花粉』について次のように記している。

に扉を開いていたのが、この『花粉』では「大都会大阪」「都市的ユーモア」という藤沢文学のキーワードが開花している。まさに、司馬遼太郎が評した「日本における最初の都市感覚の文学」の誕生である。

千日前法善寺の寄席で漫才を見ての帰りに、船場の袋物問屋の隠居七宮七兵衛とその孫の現代娘の円女は、若き漫才作者の秋山次郎とともに道頓堀筋のまむし屋で鰻丼を食べる。その時、七兵衛は秘かに、円女のフランス行きを止めてくれたら3000円を出すと秋山に持ちかける。七兵衛の企みが裏目に出て、結局、円女は洋行の船上に立ってしまう。

秋山はフランスに旅立つ円女を、胸の薔薇が潰れる程抱きしめると、円女は下船すると言い出した。秋山と七兵衛が岸壁で待っていると、一旦降船口に向かった円女は急に回れ右をしてしまう。連載第1回は漫才の舞台から始まる。エンタツ・エノスケである\*8。エンタツ・アチャコに漫才作家の秋田實が「早慶戦」を書いたのは昭和9（1934）年9月のことで、その年、アチャコが入院したので杉浦エノスケと組むことになった。秋田實は昭和10年から爆発的に漫才台本を書いた。しゃべくり漫才のやり取りから始まる新聞小説というのは前代未聞の斬新さだった。あわせて、主人公が京都大学哲学科卒の漫才作者というのも意表を突く設定である。もちろんモデルは秋田實である。その周防町にある文芸部事務所というのも、実際に秋田實が勤めていた吉本興業文芸部である。

七宮七兵衛の物語については、『茶人——花粉余聞』として、新聞連載直後に改造社『文藝』に発表された。



藤沢恒夫

昭和11（1936）年頃、法善寺花月前にて撮影された一枚。21歳でのデビューから84歳で亡くなるまで、在阪のまま流行作家であり続けた藤沢を、菊池寛は「文壇の大阪出張所長」と呼んでいた。  
出典／藤沢恒夫写真アルバム

「昭和十一年、朝日新聞に連載した『花粉』は、『純文学』のカキをふみ破った不屈きな越境者として、私自身には記念すべき最初の作品だった。主人公には、批評家の大先生の毛ぎらいしそうな若い漫才作者と、俗臭紛々たる船場の大店の隠居の老人を選んだ。当時の新しい大阪を描いた風俗小説として幸いに好評を得たが、右の二人の主人公、それから老人の孫娘である女主人公にしても、善良でいてそれぞれつむじ曲がりの一面を持っている点、作者としては大阪人の抵抗が作品のモチーフであったともいえそうだ。」

藤沢の大阪回帰を決定づけた昭和8（1933）年の大阪新聞夕刊連載『街の灯』を皮切りに、次作が『花粉』、次に『新雪』、『翼』と朝日新聞連載小説が続いた。『街の灯』ではいまだプロレタリア文学的傾向が残る中、都会的中间小説\*7

茶人仲間の老婦人の一人語り、七兵衛の船場らしい機知に富んだ吝嗇振りがユーモアたっぷりに披露される。二二六事件の年に生まれた新しい船場物語である。

藤沢恒夫は21歳で雑誌『辻馬車』を創刊して文壇にデビューし84歳で永眠するまで流行小説家として活躍した。菊池寛から「文壇の大阪出張所長」と呼ばれていたように、在阪のまま流行作家であり続けたのは、藤沢以前にはなかった。

旧制大阪高校から東京帝国大学文学部、帰阪して活躍する全期間、漫才作家の秋田實、『お父さんはお人好し』など放送界でも活躍した長沖一とは道を同じくした生涯の親友だった。

大都会大阪の、ユーモアとエスプリの効いた「笑い」は、この3人組を抜きには語れない。

#### 注

- \*1 沙土比阿はシエイクスピアの意。柳亭種彦とは江戸時代後期の戯作者。長編合巻『修紫田舎源氏』など知られる。また、正本製とは歌舞伎正本の形で書いた草双紙のこと。
- \*2 大公儀隠密とは幕府直属の隠密で、ここでは役所の判決の場に突然に現れても疑いをはさむ余地のない存在として設定されている。
- \*3 中国、南宋の桂万榮（けいばんえい）が著した裁判実例集。古今の名裁判官による144の判例から成る。
- \*4 『文藝』は改造社が出版していた文芸雑誌。文藝春秋の『文學界』や新潮社の『新潮』など同様の純文学系雑誌で、「文藝推薦」は同人誌などに発表された作品の中から特に推薦されたもので、新入賞に当たる。
- \*5 がたる路地は大阪市の上町台地にあった路地長屋の俗称。横堀や道頓堀川の川底浚いを生業にした人々が多く住んでいたところから「がたる」河童」と名付けられたらしい。織田作之助が生まれ育った長屋あたりがそう呼ばれていた。
- \*6 文芸同人誌。昭和32（1957）年5月に司馬遼太郎、寺内大吉、清水正二郎（胡桃沢耕史）、石浜恒夫、堤清一のメンバーで創刊。文学の世話性の回復を目指し、文学界に新風を送った。
- \*7 純文学と大衆文学の中間にある小説の意で、純文学作品の芸術性と、大衆文学の読物的娯楽性をあわせもとうとするものとされた。
- \*8 昭和5（1930）年に横山エンタツと花菱アチャココンビを組んで、背広に「君」「僕」の「新漫才」を始めた。その頃、東京帝国大学を中退した秋田實は藤沢恒夫の紹介でエンタツを知り、これが「しゃべくり漫才」の隆盛に発展していく。